

# 三つの《戦略創造プロジェクト》プラスワン 地域財産の世界発信で目指す持続可能なまち

## 2千年の歴史が育んだ 地域財産の数々

熊本県の北部に位置する山鹿市。この中心地は、平安時代の文献『和名類聚抄』に「山鹿郡温泉郷」と記されており、古くから温泉地として知られていた。その地を中核として中世のころには既にまちづくりの基礎が構築され、幕藩体制となった近世以降に、宿場町として大きく発展する。

その背景には、およそ2千年前から米作りが始まり、現在もさまざまな農産品を生み出す、菊池川流域の肥沃な大地の存在があった。また、山鹿は古くからこの菊池川水運の中継地であるとともに、17世紀初頭に豊前街道が整備されるなど、水陸の交通の要衝であった。特に、江戸期には熊本藩、人吉藩、薩摩藩などが豊前街道を参勤交代路に活用するようになり、山鹿は宿場町として大いににぎ

わった。

そのにぎわいは明治維新後も続いた。明治時代初期の山鹿は、熊本における近代養蚕業発祥の地となり、養蚕・製糸業が大いに栄え、付随してさまざまな産業が興った。その繁盛ぶりは、例えば旧豊前街道に面した中心市街地の一角、現在のN T T西日本・山鹿ビル横の石碑に、旧山鹿電報電話局長の名で刻まれた、次のような文言からも読み取れる（石碑の建立は昭和57年）。

「山鹿の電話は明治四十一年八月十六日、鹿本郡山鹿町一六一〇番地のこの地において単式交換機一台、市外交換機一台、市外回線三回線、市内電話四十一（件）の加入をもって開始された」

明治41年に、山鹿に電話回線が敷設されたという事実はとても興味深い。明治23年に東京市・横浜市で加入者197人をもって始まった公衆通信としての電話交換（電話回線導入）事業は、やがて大阪市・神戸市（明治25

なかしまけんせい  
中嶋憲正  
山鹿市長



年）、京都市・名古屋（明治29年）と範囲を広げていった。だが明治36年時点での加入者は全国で約3万5000人に過ぎず、まだまだ限られた人々にだけ許された、特権的な通信手段だった。山鹿市に電話回線が導入されたのは、それから5年後の明治41年。県内では熊本市に次ぐ2番目の早さだ。



千人の踊り手が金灯笼を掲げ踊る「千人灯笼」は山鹿灯笼まつりのクライマックス

また、2年後の明治43年には、山鹿市のシンボルとして今も保存されている、シャングリラ付きの豪華な芝居小屋「八千代座」(国指定重要文化財)が建設されている。

山鹿市の中心市街地には、八千代座と並ぶもう一つのシンボル施設「さくら湯」(山鹿温泉元湯)がある。その歴史は寛永17(1640)年に、肥後細川藩主専用の休憩・宿泊地であ



流域に多くの恵みをもたらしてきた菊池川

る御茶屋がその地に建てられたことに始まる。やがて明治以降、一般向け温泉浴場として開放されたさくら湯は、明治31年、道後温泉を手掛けた棟梁とうりやうによる大改修が行われ、現在に至る豪華な大衆温泉浴場としての基礎が構築された。

「電話をいち早く導入したのも、八千代座を造り、さくら湯を整備したのもみんな、養蚕業をはじめとする明治の産業振興を担った地域の旦那衆たちの力によるものです。

山鹿を巡る歴史の流れは弥生時代の米作りから始まり、古代、中世、戦国、江戸、そして明治以降とそれぞれの時代に多彩なトピックスを持つのが大きな特徴です。貴重な歴史的遺構も、県内最大の弥生時代後期集落遺跡



山鹿市では現在、《人輝き飛躍する都市やまが》を将来都市像とする《第2次山鹿市総合計画》に基づき、多様なまちづくりが展開さ

### 菊鹿ワイナリー構想と 新シルク蚕業構想

「方保田東原遺跡」(国指定史跡)、チブサン古墳(国指定史跡)などの装飾古墳群、大和朝廷の山城「鞠智城跡」(国指定史跡)など、各時代のものが揃そろっています。菊池川流域の2千年間にわたる米作りと、それにまつわる多様な技術的変遷・文化伝統については、そのストーリーが平成29年、日本遺産にも認定されています(※注Ⅱ日本遺産認定は山鹿市・菊池市・玉名市・和水町の合同申請)。

そうしたモノやコトの膨大な集積が、現在もさまざまな形で山鹿の地域資源・観光資源になっているのです(中嶋憲正山鹿市長)



明治・大正時代の意匠がそのまま残る八千代座の内部

れている。基本理念は「人を創る(人材育成)」「経済を創る(産業振興)」「住み続けたいまちを創る(人口減少の抑制)」で、それを実現するための推進エンジンとして《三つの戦略創造プロジェクト・プラスワン》とも称される《4大プロジェクト》を推進している。

「具体的には、地域再生計画として立ち上げた《菊鹿ワイナリー構想》《新シルク蚕業構想》《山鹿灯籠ジャパンブランド構想》という三つの総合戦略と、《菊池川流域の二千年にわたる米作り》の日本遺産認定を契機とする、



客の入場を待つ営業開始前のさくら湯内部

広域的な地域振興計画を合わせたプロジェクト群です(中嶋市長)

この四つのプロジェクトのキーワード「ワイナリー」「新シルク蚕業」「山鹿灯籠」「菊池川流域」こそは、冒頭から述べてきた山鹿市とその周辺エリアで展開され、引き継がれてきたまちづくり、地域づくりの過程で醸成された、現在の山鹿市における地域資源・地域財産のエッセンスそのものだ。

現在の山鹿市は平成17年1月、中心市街地を形成する旧山鹿市(昭和29年市制施行)と旧鹿本郡鹿北町、菊鹿町、鹿本町、鹿央町による1市4町の合併で誕生した。

四つのプロジェクトのうち菊鹿ワイナリー構想は、旧菊鹿町で生産されたブドウを使用し、熊本市に本拠を置く熊本ワイン株式会社が生産したブドウを醸造して世界的にも評価の高かった菊鹿ワインを、さらに戦略的に発展させるべく、山鹿市・熊本ワイン・菊鹿町葡萄酒生産振興会の3者が連携して進めた構想だ。これまでブドウの生産に特化していた菊鹿町にワイナリーを造り、ワイン醸造所や店舗、ブドウ農園、山鹿市の6次産業化施設および観光連携推進施設などを併設。菊鹿ワインを総合的な地域ブランドとして全国発信はもとより、世界発信するべく、平成29年8月に着工、平成30年11月に菊鹿ワイナリーを開業するに至った。

「ブドウの生産、菊鹿ワインの醸造、6次製品化の推進などを一元的に行う菊鹿ワイナリーには、観光拠点としても大きな期待をしています。今後は中心市街地との回遊性の確保などを図りながら、農業と観光が連携する、山鹿市にはこれまでなかったタイプの観光拠点としても、じっくり育てていければと考えています。

同時に新シルク蚕業構想、山鹿灯籠ジャパンブランド構想、菊池川流域における日本遺産関連の振興・活性化を図ることで、今後はさまざまな相乗効果がさらに期待できます(中嶋市長)

新シルク蚕業構想は、かつて隆盛を誇った地場産業の大きいなる復活という意味のみならず、現代ならではの先端技術活用による、世

# 山鹿市

市 政 ル ポ

(熊本県)



菊鹿ワイナリーではシャルドネ種など多彩なワイン用葡萄を栽培



菊鹿ワイナリー販売展示場に並び菊鹿ワインの数々

界レベルの数々の試みが行われているところがまさに画期的だ。

「明治・大正期の山鹿の繁栄を支えた養蚕・製糸業は、他の国内産地と同様、安価な輸人品の増加で急速に衰退しました。平成に入ってから養蚕農家が、市内に2軒だけという惨状にもなっていました。しかし、蚕の伝染病に弱い性質や、年3回程度しか繭を作らないという生産効率の低さを解決する《周年無菌養蚕システム》が国立京都工芸繊維大学によって確立されたことで、産業としての復活と、旧来以上の拡大が見込まれるようになりました。

そこに着目した民間企業(旧・株式会社雇用促進事業会、現・株式会社あつまるホールディングス傘下の株式会社あつまる山鹿シルク)が山鹿市と連携し、市内の廃校跡地に《周年無菌養蚕システム》を活用する養蚕工場の建設を旨とした「新養蚕業構想」を平成26年10月に立案。同じ年の12月には、蒲島郁夫熊本県知事の立ち合いの下で、同社と山鹿市との間で《新養蚕業構想に関する協定》を調印。このプロジェクトがスタートしました(中嶋市長)

周年無菌養蚕システムは、無菌・常温の環境下で蚕の伝染病を極力抑制することで、年に24回もの繭生産を可能にした空前のシステムだ。

ムだ。しかも蚕の餌にする桑の栽培に、市内の耕作放棄地を充てて「天空桑園」とすることにも、廃校跡地に大規模な養蚕工場を建設することにより、空地の有効活用にも役立っている。世界初の試みともなるこの工場は、平成29年4月に完成。山鹿シルクは現在、世界に向けた市場開拓に不可欠なブランディング事業を、精力的に展開しつつあるところだ。

## 山鹿灯籠ジャパンブランド構想と元氣プロジェクト

菊鹿ワインの製造とそれに伴う商品開発(6次製食品)や、観光産業との連携などの多角的な連携事業の展開と同様、山鹿シルクについても化粧品や医薬品など、さまざまな分野への応用が目指されており、今後の展開が非常に注目される。

こうした産業振興面におけるプロジェクトの進行と同時に進められている《山鹿灯籠ジャパンブランド構想》は、さしずめ「山鹿の心を全国・世界へ発信するためのプロジェクト」といえそうだ。

この《山鹿灯籠ジャパンブランド構想》の根幹は、山鹿市の伝統工芸品・山鹿灯籠や伝統を持つ山鹿灯籠まつり、人気の山鹿灯籠踊りを世界に発信することにあるが、その本格化に際して連携したのが世界的なファッションデザイナー、山本寛斎氏だった。

「菊鹿ワイナリー構想における熊本ワイン



山鹿シルクは化粧品・医薬品の素材としても最適



山鹿灯籠まつりは大宮神社例大祭。まつりのたびに市民が毎年山鹿灯籠を多数奉納(展示場の灯籠殿)



近年は山鹿灯籠の職人・作家育成も推進中

さんとの出会い、新シルク蚕業構想におけるあつまるホールディングスさんとの出会いと同様に、山鹿灯籠ジャパンブランド構想における山本寛齋さんとの出会いも、最初のきっかけはまさに偶然の産物でした。実は寛齋さんは、私たちがアプローチする前から、平成26年、27年と連続して、ファッションショーに山鹿灯籠踊りに不可欠な金灯籠(山鹿灯籠踊りの際に踊り手たちが頭に掲げる、金色の和紙をのりで張り合わせた精巧な灯籠)を、モデルさんたちの頭に載せるなど、独自の演出を行っておられました。これはチャンスではないかと思ひ、私どもの方から連携をお願いしたところ、二つ返事でOKをいただくことができましたのです(中嶋市長)

斎氏に依頼したのが「山鹿元氣プロジェクト・アドバイザー」への就任だった。

山本寛齋氏は山鹿市観光戦略ポスターのプロジェクトを主導した際、多国籍のモデル5人に、金灯籠をかぶせたが、それについて次のようなメッセージを寄せた。

『山鹿灯籠と寛齋ファッションの融合は『伝統』と『革新』を表現しています。ポスターのキャッチコピーである『歌舞(かぶ)れ』は、歌舞伎の語源である『傾(かぶ)く』からきています。常識はずれ、色めいた振る舞いなどを指すこの言葉は、山本寛齋のクリエイティブの根底にあるテーマです』

和紙でできているとはいえ、高さ30cmほどの

金色の灯籠を掲げて踊る、山鹿灯籠踊りのそもそのスタイルが、誠に外連味(けれんみ)たっぷりの歌舞伎精神に満ちている。以前から山鹿灯籠に着目し、ファッションショーに使っていた山本寛齋氏と山鹿市とのコラボは、必然的な組み合わせだったといえるのかもしれない。

「先ほど私は、菊鹿ワイナリー構想や新シルク蚕業構想のきっかけにおける人と人との出会い、山本寛齋さんとの出会いも偶然の産物だといえました。しかし、菊鹿ワイナリー構想にはそれ以前から地域資源としての菊鹿ワインの存在があり、シルクについても山鹿は熊本県の近代養蚕業の発祥の地で、その伝統が地域資源だった。山本寛齋さんも山鹿灯籠踊りの背後にある革新性に着目してくださっていた。そういう意味では全てが偶然のようであり、実は必然的な出会いだったのだと、今改めて思います(中嶋市長)

## 市民協働が実現する 2千年超のまちづくり

日本遺産に認定された菊池川流域の古代以来の米作り文化のストーリー(正式タイトル



山鹿元気プロジェクト・アドバイザー就任式(山本寛斎氏は赤いスーツ、モデルの頭には金灯籠)

「例えば八千代座復活の推移を見ると、それはより明確になります。八千代座は明治43年に旦那衆の尽力で建設された後、昭和20年代までは隆盛を極めたものの、昭和30年代以降はテレビの普及などで急速に衰退していきます。昭和60年代には解体してショッピングセンターを建てる計画が持ち上がりましたが、そこで立ち上がったのは有志たちでした。彼らは瓦1枚ずつを寄付する復興運動を始め、その動きが一般市民の共感、行政との連携を呼び

は「米作り、二千年にわたる大地の記憶」には、古代から現在にも継承されている平地の条里制、山間部の井手(用水路)や棚田、海辺の耕作用干拓地などへの記述がある。

実際に支流も含めた菊池川流域の各所を自分の足で歩いてみると、日当たりの良い河川敷のすぐ横の崖地に、横穴式の墳墓がうがたれている様子なども見ることができ、この地では古代から川と米作りと生活が一体になっ

ていた事実が再確認できる。

本文冒頭部分に述べた、弥生時代後期の大規模集落跡や装飾古墳群、大和朝廷の山城などの存在、菊池氏による450年以上もの統治、近世から近代に至る繁栄などについても、それらが米作りをバックボーンに成り立っていたことが、改めて納得できているのだ。

同時に、そこから派生して近代化の大きな力となったものの、一度は衰退しかけていた養蚕業が、装いも新たによみがえりつつある。さらに菊鹿ワイナリー建設や、山鹿灯籠の世界発信も含めた三つの戦略創造プロジェクトも強力に進められている。それも、市民や事業者、大学、行政、さらには外部協力者などを含めた、オール体制による協働事業として、それらの取り組みが推進されているところには大きな特徴がある。



装飾古墳として貴重なチブサン古墳

ます。そして平成8年に大修理が始まり、平成13年に完成します。その間には坂東玉三郎さんなど、各界からの多大なご協力もありました。

高齢化、人口減少時代の山鹿を支えるのは、まさにこうした山鹿に共感してくださる全ての方々との協力・協働体制です。それは三つの戦略創造プロジェクト・プラスワンを推進する中においても、日々、実感していることです」(中嶋市長)

2千年にわたる山鹿のまちづくりのこれからの主役は、歴史的に培われた地域資源に加え、地域を愛する市民、全国に存在する関係人口の人々なのだ。

(取材・文〓遠藤隆／取材日令和2年2月19日)